

今月の逸品

NO. 48 2020.04~2020.05



貝化石

京都府南部の綴喜郡宇治田原町は「宇治茶」の産地として知られていますが、その茶畑の地盤をつくる地下の地層からは多くの化石が見つっています。礫岩、砂岩、泥岩からできているその地層は、今から1600万年ほど前（新生代新第三紀中新世の時代）の浅海に堆積したもので、この地域の名前をとって綴喜層群つづきそうぐんという地層名で呼ばれています。この地層は、宇治田原町市街地の東西約6km、南北約1.6kmの盆地内に広がっていて、そこから産出した代表的な化石が写真に示す貝化石です。ノムラカガミガイ (*Dosinia nomurai*)、キララガイ (*Acila submirabilis*)、マガキ (*Crassostrea gigas*) など大変保存状態の良い化石が見つっています。産出する貝化石の近縁種は現在も生きていて、その生息環境から、浅海の暖温帯水（亜熱帯に近い比較的暖かな海域）～冷温帯水（涼しい温帯海域）を好んで生息する貝化石群であることが分かっています。このことから貝化石を含む地層ができた頃の京都の気候は、亜熱帯から冷温帯の気候下にあったことが分かります。もちろん現在の京都の様子とは全く景観が異なり、京都はどこにも存在していない頃のお話ですが、やや涼しい温帯環境は今と同程度ですが、亜熱帯環境は現在の沖縄県辺りの気候に相当します。そうした比較的暖かな海域が京都まで広がっていたと考えればイメージしやすいでしょう。

写真の貝化石群が生きていた中新世の時代は、現在の日本列島の骨格となる陸地がその当時の中国大陸から分離して開き、その割れ目に日本海が出来あがった頃です。その当時の日本列島とその周辺の海域に生息していた貝類が、現在の京都の宇治田原に化石となって見られるのです。今の京都の風景からは全く想像できませんが、社会・文化的に悠久の歴史遺産が残る京都ですが、そうした有史以前の更に長い地球の歴史を垣間見ることができるのも京都です。京都の地に暖かい海が広がり、そこには様々な動物が暮らしていたことを想像すると何となくワクワクしてしまいます。まだまだ謎が多い地層ですから、これからも新たな発見があるかもしれません。

なお、綴喜層群産の化石類は、今ではその産状を観察できる露頭（崖）は殆ど無くなり、わずかに見られる場所も安全面から採取は出来ません。

※附属図書館で展示しています。